機部
木村工
名古屋営業本

産業分野と商業分野で

独自のみず空調　提案を強化

『自然派HG空調』訴求強める



大野　直輝本部長

業務用・産業用空調システムメーカーの木村工機（社長＝木村晃氏、本社・大阪市中央区上本町西5―3―5）の名古屋営業本部（本部長＝大野直輝氏）では、産業分野と商業分野において冷温水製品の問合せが増加傾向にあり、独自製品を中心とした営業活動を展開している。営業状況について大野直輝本部長は「既存工場の暑熱対策に関する問い合わせが通年化する中、実機体感を交えた提案営業に注力している。郊外の大型商業施設に納入した大空間用ファンコイルユニットの更新時期も重なり、上期は冷温水製品の引き合いを多く頂いた」と話す。

名古屋営業本部は愛知、岐阜、三重、静岡、長野等を管轄する。日本有数の工業地帯もあり、大規模な機械工場の多い同エリアでは、空調熱源装置を備える工場が多いため、冷温水製品の需要が多いという。主力のヒートポンプ式や直膨式などの空冷製品と並び、冷温水式の空調機器も多くの実績があり、様々な要求に応えている。

産業分野では、従来から提案してきた工場用ソーン空調機が引き続き主力の一つとなる。工場内の作業環境改善を目的とした暑熱対策は、近年、季節を問わず相談が寄せられるようになった。

ホームページを通じて施主から直接問い合わせを受けるケースもあり、工場の規模や作業内容に応じた空調方式を提案する。高温環境のもとで仕事が続く現場作業者の負担軽減に加え、働きやすい職場づくりを通じた人材の確保・定着、製品品質の維持といった観点からも、空調改善への関心が高まっている。

工場では夏季の高温だけでなく、梅雨時などの高湿度も課題となる。自動車関連をはじめとする製造現場では、湿気による錆や加工精度への影響が品質面の問題につながることもある。木村工機は、作業者が気流を感じられる空調環境をつくるとともに、換気や除湿を組み合わせ、工場内の環境改善を提案する。導入を検討する施主には、製作所や工場で実際の製品を見学・体感する機会を積極的に案内している。

除湿気流の届き方や快適性を現場で確かめてもらうことで、導入後のイメージを具体化し、提案の説得力を高める。営業担当者は技術者に近い製品知識を備え、打ち合わせから設計、納入後のサービスや不具合対応まで一貫して関わる。顧客窓口を変えない対応が、信頼やリピート受注につながっているという。

商業分野では、大型店舗や商業施設に過去に納入した大型ファンコイルユニットの更新需要が顕在化している。大型店舗向けの四方向吹出しファンコイルユニットなどが更新時期を迎え、名古屋営業本部の管轄エリアでも問い合わせが増加した。従来の冷温水システムを継続利用する施設が多いなか、既設機器の状況を把握しながら、最新モデルへの入れ替え提案を推進している。

一方、同本部が今後の重点提案に位置付けるのが、水冷HP技術を活用した「水冷HP式デュアル空調機」だ。『自然派HG空調』の中核に位置するもので、冷温水コイルと水冷HP回路を組み合わせ、同じ冷温水系統を利用しながら、必要なエリアで冷房と暖房を使い分けられる。

従来の2管式セントラル空調では、季節に応じて冷水と温水を切り替えるため、建物内の一部だけ異なる空調要求が生じても対応が難しかった。同機を活用すれば、熱源側の運転モードを切り替えることなく、部屋やエリアごとの冷暖房ニーズに応えられる。

一般的な4管式では冷水と温水をそれぞれ送る配管が必要となり、設備や配管、自動制御のコストが大きくなる。一方、同機は既設の冷温水配管を生かし、設備全体を一度に更新せず、冷暖フリー化が必要なエリアから段階的に導入できる。既存の二管式セントラル空調の方式を維持しながら、より付加価値の高い空調を実現できる点も特長だ。更に冷温水配管は空調性能保持と設備の長寿命化のため、樹脂配管を推奨、冷温水製品の需要が高い名古屋エリアに適した提案として訴求する。



工場陽圧空調が導入された愛知県の現場

新たな用途としては、農業・畜産分野にも目を向ける。特に牛舎では、夏場の暑熱による牛のストレスが搾乳量や育成などに影響することが課題となっており、従来は大型扇風機や散水などが中心だった。人が働く工場と同様に、温度や湿度を管理した空調環境を整えることで、家畜の負担軽減や飼育環境の改善につながる可能性がある。既存製品の特長を生かし、畜舎の構造や飼育方法に合わせた提案を検討する。名古屋営業本部では「主力分野の需要を着実に取り込みながら、既存技術を応用できる新たな用途にも提案を広げる」（大野本部長）とした。

空調タイムス 2026年11月18日掲載